

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 5 月 27 日現在

機関番号：13301

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2014

課題番号：23520427

研究課題名(和文) 20世紀初頭の英語圏における日本演劇の上演と相互交渉の調査 郡虎彦と菊池寛を軸に

研究課題名(英文) An examination of Japanese theatre performances and mutual influences in English-speaking countries during the early twentieth century: works by Torahiko Kori and Kan Kikuchi

研究代表者

鈴木 暁世 (Suzuki, Akiyo)

金沢大学・歴史言語文化学系・准教授

研究者番号：60432530

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円

研究成果の概要(和文)：20世紀初頭の英語圏で上演された日本を題材にした戯曲の中でも、菊池寛と郡虎彦の作品は、日本語で執筆された作品が英語に翻訳・上演される過程での、文化・言語圏の移動による変容が見られる。アイルランド、イギリス、日本における資料調査と専門家との研究情報交換を行い、新資料を発掘・整理した。その研究成果を公開するために、研究分担者と共にシンポジウム及びワークショップを計三回開催したほか、国際学術集会や国際ワークショップを含む国内外の学会で研究発表を行った。それらの研究発表における議論の結果を『日本近代文学』『比較文学』等査読付学会誌で発表し、著書『越境する想像力 日本近代文学とアイルランド』にまとめた。

研究成果の概要(英文)：Among early twentieth century plays with Japan as their theme that were performed in English-speaking countries, works by Kan Kikuchi and Torahiko Kori showed transformation--through translation and performance of Japanese plays in English--owing to changes in cultural and linguistic settings. Research was conducted in Ireland, the United Kingdom, and Japan, and the findings were exchanged with experts in order to discover and summarize new data. To publish this research, three symposiums/workshops were held with co-researchers in addition to presentation of the results at domestic and international conferences, including international academic meetings and workshops. The results of the discussions at these presentations were published in peer-reviewed journals such as Nihon Kindai Bungaku (Modern Japanese Literary Studies) and Journal of Comparative Literature and were summarized in the publication 'Imagination Without Borders; Modern Japanese Literature and Ireland'.

研究分野：日本近代文学

キーワード：ジャポニスム 演劇 翻訳

1. 研究開始当初の背景

白樺派の作家・郡虎彦は、ロンドンに渡航後に W. B. イェイツやエズラ・パウンドと交流し、舞踏家・伊藤道郎と共に彼らを手助けして日本文化及び能を西洋に紹介する糸口を開くと共に、イェイツによる能ともいべき戯曲 *At the Hawk's Well* (1916) の契機をつかった。郡はロンドン大学において講義を行い、論文 “Japanese Drama” (1918) を執筆、イェイツに数回相談を受けたと述懐している。郡については、杉山正樹『郡虎彦その夢と生涯』(1987) や Yoko Chiba, “Kori Torahiko and Edith Craig: A Japanese Playwright in London and Toronto” (1996) においてその伝記的事実が調査され、戯曲 *Kanawa* とワイルド『サロメ』との比較研究(山下真由美, 1987)、渡欧以前の小説の検討(松本和也, 2007) があるものの、郡の文学史的位置、同時代思潮との関連性についてはまだ不十分である。

それだけでなく郡は、謡曲『鉄輪』をもとにした *Kanawa: The Incantation* (1917) 及び『義朝記』 *The Toils of Yoshitomo* (1922) を英語で刊行し、ロンドンで上演した。郡は、*Geisha* (1896) や *Madama Butterfly* (1905) などが持てはやされた 19 世紀末からのジャポニズムを利用し、戦略的に能や謡曲に取材した作品を西洋に向けて英語で発表したのである。そのため、彼は日本においてよりも英国及びアイルランドで評価されたわけだが、その後、菊池寛の戯曲が受け入れられる素地を作った点については全くといっていいほど研究がなされていない。さらに郡による演劇が英国で評判になった背景には、パウンドやイェイツなどによる能の再評価との連動が考えられ、それらについては成恵卿『西洋の夢幻能』(1999) など多くのすぐれた先行研究がある。しかし、そのような再評価をもたらした英国の社会変動や文化運動との関連については十分に明らかにされているとはいえない。また、野口米次郎、伊藤道郎、久米民十郎など、日本からの情報提供者や書き手との関連も不十分と言える。日本における西洋文学受容のみならず、日英文化の相互交流というクロスカルチュラルな視点から、一つの文化現象としての郡虎彦を再検討する試みが必要であろう。

申請者は、一貫して日本におけるアイルランド文学受容の解明に取り組んできており、郡らによって日本文化へと興味を持ったイェイツが、1926 年に高く評価したのが菊池寛であったことを明らかにした。菊池は、イェイツらのアイルランド文芸復興運動に共感し、巧みに日本の風俗や文化に翻案することで、「屋上の狂人」(1916) 等の戯曲を執筆したのである。これら五作品を英訳した戯曲集 *Tojuro's Love and Four Other Plays* (翻訳 Glenn W. Shaw, 1926) は、同年 *Morning Post* 紙において日本独自の価値観を描き出したと高く評価された。これまでの調査で、イェイツは、

1927 年に菊池寛の *The Housetop Madman* (「屋上の狂人」) をアイルランド文芸復興運動の拠点アベイ座で上演し、菊池をシングと並び称し、世界で最も興味深い現代作家として評価したことがわかっている。ただ、その「屋上の狂人」について、菊池自身は、シングの戯曲の影響を受けたと述べている。つまり、イェイツは菊池の戯曲のなかに、アイルランド文芸復興運動の鏡に映った似姿を感じ取ったとも言える。こうした郡や菊池の英語圏での受容は、異文化間における相互影響の興味深い例として比較研究されるべきものである。

2. 研究の目的

本研究課題の主たる目的は、イェイツを中心とした近代アイルランド文学における日本文学・文化の足跡を、当時のロンドン及びダブリンにおける上演記録や新聞・雑誌の調査によって明らかにすることである。20 世紀初頭、イェイツやシングらアイルランド文芸復興期の作家の作品が、日本において盛んに翻訳され、特に郡虎彦や菊池寛の執筆した初期戯曲にはアイルランド文学の影響が色濃い。それは、後に郡虎彦と菊池寛の戯曲がロンドンとダブリンで評価され、上演される要因ともなった。足跡の発掘と同時に、こうした相互交渉の原因と過程を総合的に考察したい。

3. 研究の方法

本研究は、鈴木暁世(研究代表者)と橋本順光(研究分担者)が相互に緊密に連携し合い、3 年計画で 20 世紀初頭の英国、アイルランドにおける日本文化の受容について郡虎彦・菊池寛を軸に調査した。概要は以下の三点に集約され、書誌を含む研究成果を英語と日本語で口頭および論文で発表した。資料の収集・整理とその研究発表は一貫して 3 年間行った。

- (1) 19 世紀後半から 20 世紀半ばまでの演劇資料が収蔵されている大英図書館、アイルランド国立図書館を中心に新聞・雑誌等の一次資料の調査・収集を行う。
- (2) アイルランド演劇の研究拠点であるアイルランド国立大学ダブリン校、アイルランド国立大学ゴールウェイ校アイリッシュ・スタディーズ研究所において調査・研究を実施する。
- (3) 郡虎彦・菊池寛による英文学・アイルランド文学受容の様相について日本での調査を行う。

4. 研究成果

研究成果の概要は、以下に述べる 4 点に集約できる。鈴木暁世(研究代表者)は、本研

究課題で得られた研究成果を、科学研究費補助金・研究成果公開促進費（学術図書）の助成を得て、単著『越境する想像力 日本近代文学とアイルランド』（大阪大学出版会、2014）として刊行し、成果を広く世に問うた。研究期間において、イエイツらアイルランドにおける郡虎彦、菊池寛らの演劇上演の実態調査と並行して、日本におけるアイルランド文学受容について日本で資料調査を実施した。橋本順光（研究分担者）は、これまでの英語圏におけるジャポニスム・黄禍論研究を踏まえ、郡虎彦・菊池寛の上演を促した背景として、東洋を舞台とした演劇やミュージカルを調査し、さらに当時のエキゾティズムを流用し流行させた日本人（郡虎彦、野口米次郎、伊藤道郎、久米民十郎ら）の足跡及びその影響を発掘した。調査のための研究打ち合わせを毎年複数回実施し、研究中間発表会としてのワークショップ及びシンポジウムは、当初の計画通り大阪で計3回開催し、専門家を交えて大いに意見を交換した。

(1) 郡虎彦が日本語で執筆した戯曲「鉄輪」を英語へと自己翻訳し、ロンドンで上演した際の受容の様相に関する調査に関しては、研究代表者と分担者がイギリスと日本における調査を協力、あるいは手分けして行った。これらの研究成果を広く発表し、専門家と意見を交換して考察を深めるために、研究分担者の橋本順光とともにシンポジウム「英国、インド、日本をめぐるアジア主義とジャポニスム」（2012年10月2日、大阪大学）、「環流の比較文学のために 日英の還流から多国間の環流へ」（2014年9月26日、大阪大学）を開催した。研究代表者は、前者では「20世紀初頭の英国演劇界における日本とギリシアの結合 郡虎彦とD. H. ロレンスをめぐって」、後者では「能「鉄輪」から郡虎彦"Kanawa"へ イギリス女性参政権運動と演劇との関わり」と題して研究発表を行った。このうち後者の研究発表は、2013年12月1日に開催された日本近代文学学会例会・国際研究集会「日本近代文学のインターフェイス」（日本大学）でおこなった研究発表「郡虎彦の海外戦略 その背景と評価をめぐって」の内容を、ロンドンにおける受容という観点にしぼって詳細に調査した研究成果であり、郡虎彦が謡曲「鉄輪」をどのように改作・自己翻訳したのかという問題を、同作の上演に関わる資料を用いて明らかにした。国際研究集会及びシンポジウムでの議論を経て、大幅に加筆・修正し、学術論文「郡虎彦「鉄輪」における改作と自己翻訳 女性参政権運動と柔術との関わり」（『日本近代文学』第92集、2015年5月、査読有）として刊行した。「鉄輪」を上演したパイオニア・プレイヤーズと演出家イーディス・クレイグは女性参政権運動と関わっており、同作は「精神的な柔術」として評価された。「鉄輪」上演と評価の背景には、二〇世紀前半の英国における

女性参政権運動と柔術との結びつきがあったことを指摘し、郡が「鉄輪」を改作・自己翻訳していく過程が、当時のイギリスの社会運動や思潮と響きあっていたことを明らかにした。

(2) 菊池寛の戯曲「屋上の狂人」がグレン・ショーによって翻訳され、ダブリンで上演されたという日本近代文学とアイルランド文学の相互交渉の問題に関しては、研究代表者と研究分担者が協力して、アイルランド、イギリス、日本における資料の収集と調査、研究を行った。

その結果、一九二六年十一月二九日、アビー座の舞台で『屋上の狂人』の翻訳劇 *The Housetop Madman* が、「ダブリン・ドラマ・リーグ」によって上演されたことを突き止めた。アイルランド以外の国の「ナショナル」な作家の戯曲を積極的・実験的に上演した Dublin Drama League で、菊池の『屋上の狂人』が上演されたという事実を、モーニング・ポスト紙の書評と併せて考察し、英語圏では菊池寛が「日本的」な作家として受容されたことを明らかにした。イエイツは、イギリスとアイルランドという二項間に存在する文化的依存とナショナリズムの間で軋みあう緊張関係を脱するために、アジアの芸術を中立的な第三項として置くことで、西洋とは異なるアジアの芸術が生み出す美を新たな糧として自らの想像力を走らせ、西洋の芸術を乗り越える新しい美を生み出そうとしていたと考えられる。イエイツにおける、芸術の脱英化（de-anglicisation）、脱中心化（decentration）、脱植民地化（decolonization）への志向が、日本の能や現代演劇への関心を引き起こし、菊池寛の戯曲「屋上の狂人」の上演と評価へとつながったことを指摘した。この研究成果は、前述の単著『越境する想像力 日本近代文学とアイルランド』（大阪大学出版会、2014年）として刊行した。

著書刊行後もさらに研究を進め、2015年3月7日 国際ワークショップ "Translation and Shared Literary Imagination in the Early 20th Century" (Sophia University Yotsuya Campus, Mar 7, 2015)にて、研究発表 "The Reality of Illusion in Modern Drama: Kikuchi and Pirandello as Read by Yeats" を行った。アイルランドのアビー座を拠点とする Dublin Drama League の公演では、1926年10月に Pirandello の *The Pleasure of Honesty* が、11月に菊池寛の *The Housetop Madman* が上演されている。菊池寛の戯曲がルイーダ・ピランデッロと並んで紹介された背景にあるアイリッシュ・ナショナリズムの問題を指摘した。この研究成果は書籍として刊行される予定である。

(3) 郡虎彦や菊池寛ら日本の作家たちの戯曲が英語圏で受容された背景としてのイギリス、アイルランドにおけるジャポニスムの研究に関しては、研究期間4年間を通して、研究代表者と分担者がそれぞれイギリス、アイルランド、日本での研究資料の収集と調査、

研究成果の発表を行った。2011年に開催された国際ワークショップ *New Perspectives on Asian Design and its Histories: Geographies, chronologies, methodologies* (Victoria and Albert Museum, London, July 22, 2011)において、鈴木暁世が研究発表“*Japonisme and the Celtic Revival in Art and Design in the Early Twentieth Century*”を、橋本順光が研究発表“*Asian Design for the Asians? The Lotus Pattern Story: concerning Gurcharan Singh's 1920 Visit to Takumi Asakawa in Korea*”を行った。このワークショップにおける議論をより深めるため、橋本順光と共に2012年にワークショップ「西洋から見た日本の「近代化」 英語圏を中心に」を企画し、関連分野の専門家を招へいして研究発表「20世紀初頭の 아일랜드におけるジャポニスム ハリー・クラークを中心として」を行った。

(4) 最後に、研究代表者と研究分担者が協力して本研究課題を推進したことの相乗効果について以下に記す。

郡虎彦の戯曲「鉄輪」が1917年にロンドンで上演された時、『モーニング・ポスト』は「精神的柔術」(spiritual ju-jitsu)と評する劇評を掲載した。郡虎彦は、「鉄輪」を日本語から英語へと自己翻訳する際に女性が自己の意志で「望み」を叶えるというテーマを押し出している。郡による改作と自己翻訳の過程は、彼がイギリスへと渡り、女性参政権運動に携わり、演劇による社会改良を志向するイーディス・クレイグやパイオニア・プレイヤーズと関わり合う中で、自らの置かれた不満で劣悪な状況を自らの力によって変えて行こうとする女性の姿に、郡自身が関心を広げていったことを英語版「鉄輪」創作に生かしたことを示している。郡虎彦による英訳「鉄輪」の成立とロンドン上演は、ロンドンの同時代思潮と深く切り結び、社会と関わりあう演劇を目指した戯曲を模索する動きと、女性が自己の意見を表現することの出来る社会を目指す女性参政権運動の大きなうねりのなかに位置していると考えられる。

橋本順光は、アメリカの社会哲学者リチャード・グレッグが、『ガンジーの非暴力的抵抗の心理学と戦略』(一九二九)の中で、ガンジーの非暴力運動を、上西貞一(1901-1978)の言葉を引用しながら「ある種のモラル柔術」(a sort of moral jiu-jitsu)と称したと指摘した (Yorimitsu Hashimoto, "Soft Power of the Soft Art: Jiu-jitsu in the British Empire of the Early 20th Century," *The 38th International Resesrah Symposium, International Research Center for Japanese Studies*, 2011)。暴力に訴えるのではなく非暴力主義的抵抗によって、自らの権利を主張する行為に対して「モラル柔術」と例えたこの例は、「鉄輪」が「精神的柔術」と称された事例と通底しているであろう。

橋本順光は、一連の研究において、エドワード朝の国民国家効率化運動において日本がロールモデルとして過大評価され、簡素で

効率的な武士道が流行したことを挙げ、その発露として、禅、俳句、柔術、能、文人画などへの関心が高まり、再評価の土壤が形成されたことを指摘した。また英国の(大衆)演劇におけるジャポニスムについても、*Geisha* (1896)や *Typhoon* (1909)などの例から、19世紀的なジャポニスムから、武士道や禅などへの関心に基づく20世紀のジャポニスムへの変化を明らかにした。英語圏における20世紀初頭のジャポニスム関連作品や資料、日本のイメージに関する記事などの周辺資料を、研究代表者と研究分担者が調査・分析することによって、郡による演劇の英国での高い評価とパウンドやイエイツなどによる能の再評価とが連動していたこと、さらにそれらの再評価をもたらした英国の社会変動や文化運動との関連が明らかになり、その後菊池寛の戯曲が受け入れられる素地を作った点を立体的に浮き彫りにするという研究上の相乗効果が得られた。

女性参政権運動に深く関わっていたイーディス・クレイグが設立した劇団パイオニア・プレイヤーズによって「鉄輪」が上演された時、「鉄輪」の女の姿は、武力闘争ではなく演劇や演説という方法によって女性の権利の獲得を目指した当時のロンドンの女性参政権運動家と重ね合わされたと考えられる。日清・日露戦争に勝利し、日英同盟に基づき第一次世界大戦へ参戦した日本の姿は、当時のイギリスにおいて小さな身体の方が大きな身体の手を打ち負かす柔術と結び付けられ、女性参政権運動において柔術が取り入れられたのも、身体の小さな者が時として自分より身体の大い相手を手を打ち負かすという柔術の性質が着目されたからであろう。郡による日本の演劇という要素を強調した演出が日本に由来する柔術のイメージを呼び起こし、さらに「鉄輪」を上演したパイオニア・プレイヤーズが関わっていた女性参政権運動と柔術との関わりを背景として「鉄輪」における「呪いの成就」が「精神的な柔術としての偉業の成就」として享受されたと考えられる。郡虎彦「鉄輪」の劇評に、「精神的な柔術」という言葉が使用されたのは、この戯曲が当時のイギリスにおける日本の国家イメージ、演劇を通して社会と関わっていくという同時代のイギリス戯曲の潮流と郡虎彦の関わり、演劇を通してイギリス女性参政権運動に関わったイーディス・クレイグとパイオニア・プレイヤーズとの交流、女性参政権運動における柔術の実践という複数の文脈の結節点にあり、「鉄輪」の女が呪いを成し遂げるといった行為が「不誠実」な男との不満足な関係への女からの異議申し立てと決別の行為として解釈されたことを証するものであると言えるだろう。

英語圏での郡・菊池ら日本の近代劇受容は、日本におけるイギリス・アイルランド文学受容の流行現象を一因としつつ、パウンドやイエイツらによる能などの日本文化再評価の

動き、武士道や柔術などへの関心の高まりと再評価の土壌形成という 19 世紀的なジャポニズムから 20 世紀のジャポニズムへの変化と強く連動していた点が明らかになった点は、本研究課題における研究代表者と研究分担者との間での研究連携及びワークショップやシンポジウムでの議論から得られた。本科学研究費補助金による研究成果として報告すると共にさらに研究を進めていきたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 9 件)

1. 鈴木暁世, 「一人で生きる道」の探求—松村みね子/片山廣子とレディ・グレゴリー, 論潮, 査読無, 8 号, 2015 年, 掲載頁未定
2. 鈴木暁世, 郡虎彦「鉄輪」における改作と自己翻訳—女性参政権運動と柔術との関わり—, 日本近代文学, 査読有, 92 集, 2015 年, pp.1-16
3. 鈴木暁世, 日本近代文学におけるアイルランド文学受容—翻訳と紹介記事をめぐって—, エール, 査読無, 33 号, 2014 年, pp.17-43
4. 橋本順光, 魂の入れ替わりと『秘密』, 産経新聞関西版, 査読無, 2 月 27 日号, 2014 年, p.1
5. 橋本順光, 宝探しと『ワンピース』, 産経新聞関西版, 査読無, 1 月 30 日号, 2014 年, p.1
6. 鈴木暁世, 20 世紀初頭のアイルランドにおける日本の染型紙の受容と展開, アジアをめぐる比較芸術・デザイン学研究—日英間に広がる 21 世紀の地平—, 査読無し, 1, 2013 年, pp. 51-57
7. 橋本順光, 初恋小説の系譜, 産経新聞関西版, 査読無, 8 月 22 日号, 2013 年, p. 1
8. 橋本順光, 唯美主義者たちのテーブルで, ヴィクトリア朝文化研究, 査読有, 10 号, 2012 年, pp. 101-102
9. 橋本順光, 第二ジャポニズム論の試み, ジャポニズム研究, 査読有, 31 号, 2011 年, pp.32-38

[学会発表](計 16 件)

1. Akiyo Suzuki, "The Reality of Illusion in Modern Drama: Kikuchi and Pirandello as Read by Yeats," 国際ワークショップ "Translation and Shared Literary Imagination in the Early 20th Century," Sophia University Yotsuya Campus(東京都・千代田区), Mar 7, 2015.
2. 鈴木暁世「郡虎彦「鉄輪」考—改作と翻訳をめぐって—」, 金沢大学国語国文学会二〇一四年度研究発表会講演, 金沢大学サテライトプラザ(石川県・金沢市),

2014 年 10 月 11 日。

3. 鈴木暁世「能「鉄輪」から郡虎彦"Kanawa"ヘーイギリス女性参政権運動と演劇との関わり」, シンポジウム「環流の比較文学のために—日英の還流から多国間の環流へ—」, 科学研究費補助金 基盤研究 C 「20 世紀初頭の英語圏における日本演劇の上演と相互交渉の調査—郡虎彦と菊池寛を軸に」(研究代表者・鈴木暁世)研究成果発表会, 大阪大学(大阪府・豊中市), 2014 年 9 月 26 日。
4. 鈴木暁世「昭和初期の「農民文学」におけるアイルランド」, 第一回アイルランド文学研究会, 渋谷区勤労福祉会館(東京都・渋谷区), 2014 年 8 月 30 日。
5. 鈴木暁世「北日本は「日本の愛蘭」なのか—農民文学運動において語られる「田舎」—」, 日本近代文学会北陸支部例会, 石川四高記念文化交流館(石川県・金沢市), 2014 年 5 月 10 日。
6. 橋本順光, さがしものは見つかりません! 泉鏡花の「金時計」からクールボの「七つのダイヤモンド」までの宝探しの系譜, 阪大比較文学会(招待講演), 大阪大学(大阪府・豊中市), 2014 年 2 月 5 日
7. 鈴木暁世「郡虎彦の海外戦略—その背景と評価をめぐって—」, 日本近代文学会例会, 国際研究集会「日本近代文学のインターフェイス」, 日本大学(東京都・世田谷区), 2013 年 12 月 1 日
8. 鈴木暁世「公開講演 海を越えた戯曲」, 第 58 回福岡女子大学国文学会大会, 福岡女子大学(福岡県・福岡市), 2013 年 7 月 8 日。
9. 橋本順光, 欧州航路と異文化交流 大英帝国・横浜・『風土』, 阪神シニアカレッジ(招待講演), 阪神シニアカレッジ国際理解学科(兵庫県・尼崎市), 2013 年 6 月 25 日
10. 鈴木暁世, 日本近代文学におけるアイルランド文学受容—翻訳と紹介記事をめぐって—, 日本アイルランド協会創立 50 周年記念シンポジウム「アイルランドと日本」, ゲートシティ大崎(東京都・品川区), 2013 年 3 月 23 日
11. 鈴木暁世, 20 世紀初頭の英国演劇界における日本とギリシアの結合—郡虎彦と D. H. ロレンスをめぐって—, シンポジウム「英国、インド、日本をめぐるアジア主義とジャポニズム」, 科学研究費補助金 基盤研究 C 「20 世紀初頭の英語圏における日本演劇の上演と相互交渉の調査—郡虎彦と菊池寛を軸に」研究成果発表会, 大阪大学(大阪府・豊中市), 2012 年 10 月 2 日
12. 鈴木暁世, 20 世紀初頭のアイルランドにおける型紙の受容と展開, ジャポニズム学会例会シンポジウム「世界に広がる型紙 型紙研究の最前線」, 三重県立美術

- 館（三重県・津市），2012年9月28日
13. 鈴木暁世，20世紀初頭のアイランドにおけるジャポニスムーハリー・クラークを中心として，ワークショップ「西洋から見た日本の「近代化」ー英語圏を中心に」，科学研究費補助金 基盤研究C「20世紀初頭の英語圏における日本演劇の上演と相互交渉の調査ー郡虎彦と菊池寛を軸に」研究成果発表会，大阪大学（大阪府・豊中市），2012年8月2日
 14. 橋本順光，世紀転換期の英国における松山鏡の受容と土着化，ワークショップ「西洋から見た日本の「近代化」 英語圏を中心に」，科学研究費補助金 基盤研究C「20世紀初頭の英語圏における日本演劇の上演と相互交渉の調査ー郡虎彦と菊池寛を軸に」研究成果発表会，大阪大学（大阪府・豊中市），2012年8月2日
 15. Yorimitsu Hashimoto: "Asian Design for the Asians? The Lotus Pattern Story: concerning Gurcharan Singh's 1920 Visit to Takumi Asakawa in Korea" *New Perspectives on Asian Design and its Histories: Geographies, chronologies, methodologies*, July 23, 2011, Victoria and Albert Museum, London.
 16. Akiyo SUZUKI, "Japonisme and the Celtic Revival in Art and Design in the Early Twentieth Century," *New Perspectives on Asian Design and its Histories: Geographies, chronologies, methodologies*, July 22, 2011, Victoria and Albert Museum, London.

〔図書〕(計1件)

鈴木暁世（単著），大阪大学出版会，『越境する想像力』，2014年，pp. 1-418

〔産業財産権〕

○出願状況（計0件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計0件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

鈴木 暁世 (SUZUKI AKIYO)
金沢大学・歴史言語文化学系・准教授
研究者番号：60432530

(2)研究分担者

橋本 順光 (HASHIMOTO YORIMITSU)
大阪大学・文学研究科・准教授
研究者番号：80334613